

浄土宗西山禅林寺派

潮音寺だより

<http://www.ne.jp/asahi/choonji/namo/>

ナモの寺 検索

〒456-0034 名古屋市熱田区伝馬一丁目 10-11

第318号
平成22年4月

電話 052-671-4831

ファックス 052-671-4856

choonji@aichi.email.ne.jp



井底に紅塵生じ
高山に波浪起る

【出典】『拾得詩』「井底に紅塵生じ、高山に波浪起る。石女石児を生み、亀毛数寸長す。(以下略)」
による。自己本来の本性を見極める悟りの境地は、不可思議な世界であることを述べたもの。

撮影：超空正道

いつも
見慣れたもの
見慣れた景色を
ただ
見ていたでは
何も変わらない

いつも
同じ方法
同じ考えで
ただ
繰り返していたでは
何も生まれない

そんなこと
絶対ありえない
そう思えるところに
物事の本質は
隠れているもの

本来の面目
見極めてみよう
掘り下げてみよう

寒山拾得 (下)

寒山拾得のような生き方は、地位も名誉も家庭も捨て、世間のしがらみを断ち切った、いわば誇り高きホームレスのようであり、万人向けとはとても言い難いものがあります。しかし、執着を捨て去るという、仏法の根本の教えの精神を学ぶ上で、その詩集を読み味わうべきは多々あります。簡潔でなおかつ深淵な言葉をとおして、現代人の鈍った性根をたたき直し、なにがしかの力を奮起させ、明日への生きるエネルギーがいただけることは間違いありません。

さて、寒山が文殊菩薩で拾得が普賢菩薩ということであれば、豊干は釈迦牟尼如来ということになります。その豊干の詩はどういうわけか、わずかに二首のみであります。

◎二(豊干詩)

本来無一物

亦た塵の払う可き無し

若し能く此れに了達すれば

坐して兀兀たるを用いず

【解釈】本来何一つ存在しない、それで取り除く塵さえも無い。もしもこの道理をはっきりと悟得しておれば、ここつと坐禅に精を出さなくてもよい。

《私評》空の教えを端的に言い得た「本来無一物」を体得することができれば、悩みなぞ吹っ飛び、随分気が楽になるもの。生まれる以前、影も形もなかった私たちは、本来無一物。縁を得て我が肉体をはじめとして、今いたたいているものに感謝こそすれ、執着すべきものは何もない。

◎二四(以下、拾得詩)

若し老鼠を捉うることを解せば

五百の猫に在らず

若し能く理性を悟れば

那んぞ錦繡の包に由らん

真珠席袋に入り

仏性蓬茅に止まる

一群の取相の漢

意を用うるも総て交わる無し

【解釈】もしも鼠を捕らえることがわかっておれば、別に五百の猫がおらなくてもよい。もしも不変の本性を悟ることができれば、錦の刺繡をした立派な物に包むことはいらぬ。真珠は粗末な藁につみに入っても真珠であるし、仏法はわらわぶきの粗末な家にあつても仏性である。一群の形に執着する奴らには、心を配っても全く通じない。

《私評》高級ブランドに身を包んだからといって、その人が立派になるわけではない。飾るもので、騙したり、騙されてはいけない。少々古いですが、水前寺清子の『いっほんどっこの唄』(作詞・星野哲郎)「ほろは着てても、こころの錦」の心意気こそ大切。

◎三〇

門を閉ざして私かに罪を造り
災殃を免れんと準擬す
他の悪部の童に

抄し得て閻王に報ぜ被る
縦い鑊湯に入らざるも
亦た須らく鉄床に臥すべし
人を雇いて替るを許さず
自から作して自身当る

【解釈】門をしめてひそかに罪を作り、災難をのがれようとしている。悪い者どもを見張っている者が、書き出して閻魔大王に報告している。たとえ釜ゆでの拷問を受けなくても、鉄床の責めは覚悟しなければならぬ。人を雇い入れて身代りさせることは許されない。自分でなしたことは自分で責任をとらなければいけない。

《私評》物事には原因があり、その結果がある。ひとつの原因には、相応な結果がともなう。つまり、因果応報。

そして、自分の原因となる行為の結果を、自分が受けることを自業自得という。今の自分は、過去の自分の結果であり、今の自分の行いは、未来の自分を決定づける。あくまで自己責任、誰も責めることはできない。

◎三六

出家は出離を求め
苦しき衆生を哀念す

仏を助けて化を揚ぐるを為し
教えて路を選びて行か令む
何ぞ曾て苦を救うを解せんや
意を恣にして乱れて縦横
一時に同じく溺を受け
俱に大深坑に落ちん

【解釈】出家の人は俗世を離れ出ること求めて、苦しみ悩んでいる衆生を気の毒に思っている。仏をお助けして大いに教化をなし、衆生が迷わず正道を選んで行くように教え諭すものだ。今出家の者は、衆生の苦しみを救って

やることなんか知ってはいない。気まま勝手にやりほうだい。こういう奴は一度に皆水に溺れ、もろとも大きな深い坑に落ちるんだ。

《私評》寒山拾得は、俗を断ち切れないうでいる似非出家者に対して、手厳しく批判している詩をいくつも残している。私自身、それらの詩を読むにつけ、仏門に身を置く者として、僧籍を汚していまいかと恥じ入るばかり。折も折、世も末と言うべきか、夜遊び、ギャンブルの果てに多額の借金を作り、こともあろうに保険金目当てに、自坊である由緒ある伽藍に放火したという、とんでもない住職の出現には、ただ啞然。聖と俗は宗教の重要なテーマ。寒山拾得の言は、まさに頂門の一針。

※注 詩に付した番号、及び、書き下しは、座右版『寒山拾得』久須本文雄著（講談社）によった。また、【解釈】も同著作からの引用である。

◎雪隠せつちん

もちろんトイレの代名詞。中国浙江省の禅寺雪竇山靈隱寺で、雪竇せつどう禪師ぜんじがとかく汚い仕事と嫌われがちな便所掃除を大切にされた故事から起こっている。正しくはせつ、いと発音。あるいは、せつちとも。

しかしこの考えは正しくないという説も強い。禅寺では東西両側にトイレが設けられたが、西側のトイレは「西浄」と呼ばれ、常に清潔にしておくべき場所であると考えられていた。この西浄は唐音でせいちんせいちんと発音する。この音に漢字を当てはめて生まれたのが「雪隠」というわけだ。

その他、トイレの名としては「廁かわや」「後架ごか」「御不浄ごふじょう」が仏教関係から出たことばとされている。

廁は、川の上にトイレを造ったた

め(つまりは現在の水洗トイレに近い。日本では高野山の例が知られている)。

また後架は、もともと禅寺の洗面所だったが、僧堂の後ろに架け渡して造られたためにこうした名がつき、やがて洗面所はトイレと混同されるようになったという。

御不浄は「不浄ふじょう」(汚れている)という仏教語から出たもので、月経の差別用語であることはいうまでもない。

この雪隠ということばは古くから庶民に親しまれ、さまざまに卓抜な表現を生んだ。その例をあげてみよう。

「雪隠淨瑠璃じやくおんじゆるり」—雪隠で屈かがんでるばかりで人前に披露ひやうできない芸下手な芸。「雪隠大工」—便所しか造れない下手な大工。「雪隠詰め」

—将棋から生まれたことばで、逃げ場所のないところへ追い込まれること。「雪隠火事」—やけくその洒落しやれ。「雪隠で饅頭まんじゅう」—便所は唯一のプライベートを保てる場所であるという意味。さらには、「雪隠と持仏じぶつ」—家になくてもはならぬもの、ということわざもある。

〔仏教のことば〕早わかり事典

雑記

▼菜の花



春を感じさせてくれるものはいろいろあります。見て楽しむもの、食して楽しむもの、それぞれに興味は違いましうが、両方楽しめるものとなると「菜の花」。ほんのりとした苦み、またこれがよい。

◆真珠婚小鉢まなまに菜花なばな

孫ふたり 沐魚